

1:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。1:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。1:17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。1:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。1:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、1:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。

皆さん、おはようございます。今朝ここで皆さんにお会いできて光栄です。私をご存知ない方もいらっしゃると思いますので、まず自己紹介をさせていただきます。私はブラッド・ハウディシエルと申します。米国出身です。OICには25年ほど集っています。長年、ここOICでは音響担当というあまり皆さんの目に触れない奉仕をさせていただいてきました。それ以外にも、小グループのバイブルスタディのリーダーなどで奉仕させていただいたことがあります。昨年になって、アリストテア牧師から日曜礼拝の説教を依頼されました。ここで説教を依頼されたのはそれが初めてでした。それまでは、神のみことばを取り次ぐ説教を皆さんの前で語るなど想像できませんでした。会衆の皆さんに神のみことばを取り次ぐというのは大きな務めです。けれども、牧師の依頼を冷静にお受けしました。これは自分でも驚きでした。数年前まで、自分にそのような働きができるとは思っていませんでした。けれども、神の恵みによって、どういうわけか昨年にはその備えができていました。今日は、ここで説教を語るのは3度目となります。

皆さんご存知のとおり、私は、古代史、近代史、キリスト教史など、歴史が大好きです。私は、歴史に関連した説教を毎回語っているようです。キリスト教の歴史上いくつかの時点で、キリスト教の教えが簡潔にまとめられた信仰の基本概要へと凝縮されました。昨年は、宗教改革500周年だったので、昨年9月の私の説教のタイトルは、「宗教改革におけるプロテスタントの五大原理」でした。その五大原理には、聖書のみ、信仰のみ、恵みのみ、といった事柄が含まれます。宗教改革は、宗教儀礼の遵守が重んじられていた中世の時代に、福音の本質に立ち戻ることを呼びかけるものでした。この説教を語って以来、私はふたつの古代信条について考えるようになりました。これらは、キリスト教の初期数世紀にできたもので、キリスト教信仰の本質的内容の簡潔なまとめです。その本質的内容とは、イエス・キリストを信じる信徒が信じるべき本質的教理です。このふたつの信条は、使徒信条、およびニカイア信条と呼ばれます。もともと、このふたつの信条を4月の説教で同時に取り上げようと考えていました。このふたつは関連性があり、重複した内容もあるからです。けれども、一度の説教でふたつとも取り上げるには内容が多すぎると思い、2か月前は使徒信条のみについて語りました。そして今日、ニカイア信条についてお話しします。

4月には、使徒信条を一文ずつ取り上げ、その内容を教える聖書箇所をお分かちしました。けれども、今日は違ったアプローチをしようと思います。先ほど申し上げたように、このふたつの信条には重複する内容が含まれます。今日は、ニカイア信条の中で、使徒信条に記されている内容の発展形と考えられる部分に焦点を当てたいと思います。そして、4世紀にニカイア信条がどのようにして生まれたかを歴史的に説明したいと思います。今日の説教を準備していて気づいたことがあります。それは、今日のメッセージが、歴史、聖書の教え、キリスト教の本質的な神学、そして、個人的な証を含む多面的な内容であるということです。最初に、短く証を分かち合いたいと思います。

私は幼いときに、とてもすばらしいルーテル教会に通っていました。十代のころに家族で通った教会はそこはずいぶん違っていて、私はあまり気に入りませんでした。十代というのはあらゆることについて疑問を持つ年頃です。それで、私はキリスト教が本当に真理かということを疑問に思うようになりました。それから大学に進み、単立の福音教会に通いましたが、そこはすばらしい教会でした。私はそこで、初めて聖書通読をし、キリスト教が真理だという結論に至り、キリストを救い主として受け入れました。

その後、夏休みで実家に帰ると、ふたりの宣教師が実家を訪ねてきました。最初、彼らが引用している聖書箇所に関連性がわかりませんでした。ふたりが取り出した本を見て気づきました。それは、ものみの塔が出版した本でした。このふたりは、エホバの証人だったのです。エホバの証人は、キリストの神性や三位一体の教えを否定します。「三位一体」という単語は聖書に一度も出てこないのですから。

さて、当時の私は、聖書に記されていない教会の伝統をすべて取り去ることに情熱を注いでいました。聖書自体が何と語っているかを学ぶことに興味がありました。聖書、聖書、聖書、だったわけです。「三位一体」という単語が聖書に出てこないことは知っていたので、ものみの塔の本を興味深く読みました。けれども同時に、図書館へ行きました。伝統的な三位一体を教えるキリスト教団体が出版したもので、エホバの証人の神学を批評する書籍を見つけるためです。結果的に、エホバの証人の神学は受け入れられないという結論に至りました。

その理由のひとつは、新約聖書の中で、旧約聖書の神に関して記された箇所を引用してキリストを指し示すことがあるからです。ヘブル1章はその一例です。1-2節は次のとおりです。「1:1 神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。1:2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。」

そして、8節前半は語ります。「1:8 御子については、こう言われます。『神よ。あなたの御座は世々限りなく、…』何と書いてありますか。「1:8 御子については、(神は) こう言われます。『神よ。…』」

新約聖書の著者が詩篇 45 : 6 を引用して、イエス・キリストに当てはめたということです。

ヘブル 1 : 10 もふたたび、神について記された詩篇を引用し、御子にあてはめます。「1:10 またこう言われます。『主よ。あなたは、初めに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。』」

詩篇 102 : 25 は、主なる神が天地を創造されたと語ります。ヘブル人への手紙の著者は、この箇所を御子に当てはめ、創造主なる神と御子が等しいとしています。

このような例を挙げていくと切りがないのでここでやめておきましょう。三位一体の教えの賛否両論について調べていたころの私は、伝統や教派に抵抗がありました。三位一体の観念自体、教会が腐敗しつつあった中世初期の名残だという主張にも耳を傾けました。けれども、聖書を学ぶ中で、父、子、聖霊という3つの個別の位格でご自身をあらわされる神を指し示す聖書的根拠があると確信するようになりました。これが、代々クリスチャンの大多数の見解です。私は、キリスト教の初期数世紀の教父たちが見出した結論を尊重することを学びました。

では、今日のメッセージの本題に入りたいと思います。古代教会におけるふたつの基本信条を見ていきましょう。

使徒信条は、新しい信徒が受洗時に朗読する洗礼信条として古代教会で生まれました。新たな改宗者は、使徒信条の要点について教えを受け、キリスト教信仰の本質的な教理を理解し信じていることを確認したうえで洗礼を受けます。

ニカイア信条の起源はこれとは違えます。4世紀に教会を揺るがした神学的思想に対応するため主教らが集まったニカイア公会議で採択されました。そこでは、東方教会の洗礼信条をもとに、神

のひとり子イエス・キリストというお方に関する神学的見解を明確にする声明が盛り込まれました。閉会時には、会議に参加した主教ほぼ全員がそこに記された教理を支持するという認定の署名をしました。これらふたつの信条を並べてみると、一方は「わたしは」という単数形を用いているのに対し、もう一方は「われらは」と複数形を用いています。使徒信条は、受洗時にキリストチャン一人が朗読するものでした。ニカイア信条は、教会の指導者である主教が述べた教会全体の集合体としての信仰に対する共同声明です。だから複数形が用いられているのです。（もともとは複数形でしたが、現在は単数形で記されているものを目にすることもあります。）

後ほど、ニカイア公会議についてお話します。その歴史背景についてお話する前に、このふたつの信条の冒頭部分を皆さんにご覧いただきます。そうすれば、ニカイア信条が発展形であるという意味がおわかりいただけるかと思えます。使徒信条の冒頭部分は次のとおりです。「わたしは、天地の造り主（つくりぬし）、全能の父なる神を信じます。わたしは、そのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます」。ニカイア信条は、「われらは信ず。唯一の神、全能の父、…」と始まります。

「唯一の」という言葉が追加されています。唯一の神。これは、多神教が一般的な世の中で、一神教であることを強調するためです。では、旧約聖書のもっとも有名な個所を読んでみましょう。申命記6:4です。「聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。」このことばは、ヘブル語の聞くという単語「シェマー」から、「シェマー・イスラエル」と呼ばれています。イスラエルの神ヤハウェはひとりです。ヤハウェはイスラエルの唯一の神となるべきお方です。そして、私たちのキリスト教信条もまた、この唯一の神を信じると主張します。

「われらは信ず。唯一の神、全能の父、天と地、すべて見えるものと見えざるものとの創造者を。」神は、地面、木、雲、星といった私たちが目に見えるものだけでなく、霊など見えないものもお造りになりました。神ご自身は造られたものではありません。御子も造られてはいません。神は御子とともにこの世を造られました。

ヨハネ1:1-3は、「ことば」（ロゴス）と呼ばれるイエスについて次のように語ります。

「1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。1:2 この方は、初めに神とともにおられた。1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」

ですから、イエスは初めから神とともにおられました。そして、創造の業に加わっておられました。すべての被造物は御子をとおして造られたのです。

コロサイ1:15-16aは、イエスについてこう語ります。

「1:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。1:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、…」

ニカイア信条の次の部分は、「われらは信ず。唯一の主イエス・キリストを。」という言葉で始まります。コリント第一8:6は語ります。

「8:6 私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。」またエペソ4章5-6節には、次のようにあります。「4:5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。4:6 …すべてのものの父なる神は一つです。」「われらは信ず。唯一の主イエス・キリストを。」

今日のメッセージのタイトルは、「ニカイア信条：キリストの神性と三位一体に関する基本声明」でした。今日注目したいのは、イエス・キリストが完全に神であるという信条の声明です。また、聖霊が父、御子、御霊の三位一体における同等の位格であることについても触れたいと思

います。そのために、まず4世紀初頭の状況についてお話ししましょう。ではここで5分ほど歴史についてお話します。

皆さんもご存知のとおり、初代教会はローマ帝国による厳しい迫害の時代を経験しました。ローマ皇帝コンスタンティヌスがクリスチャンになったことで、この迫害の時代は終わりました。紀元313年、皇帝はミラノ勅令を發布し、少数派だったクリスチャンへの迫害は公式に終了しました。コンスタンティヌスの行為は、キリスト教をローマ帝国の国教としたととらえられがちですが、実際に国教としたのは別の皇帝で、この約60年後のことです。ミラノ勅令は、クリスチャンに信教の自由を与え、没収されていたクリスチャンの財産の返還を命じました。

ところで、当時のイタリア北部ミラノは、長い間、西ローマ帝国の首都でした。皇帝コンスタンティヌスは、一連の戦闘を経て帝国統一を成し遂げ、首都をミラノからボスポラス海峡に面したギリシャの都市ビザンチンに移します。そして、その都市名をコンスタンティヌスの町を意味するコンスタンティノポリスに改名します。現在、そこはイスタンブールと呼ばれます。（余談ですが、これ以後の東ローマ帝国は、この町の旧名ビザンチンからビザンチン帝国と歴史家に呼ばれることがあります。）さて、このコンスタンティノポリスの南に位置するニカイアという町で、皇帝コンスタンティヌスは主教たちによる全キリスト教会議を招集しました。教会で分裂騒ぎを起こしていたさまざまな問題について話し合うためです。これが、325年に開かれたニカイア公会議として知られる会議です。

当時、教会では議論の種となる問題がいくつもありました。皇帝コンスタンティヌスは、帝国内での平和を求めていたので、教会内の平和も求めてこの会議を招集しました。主教たちが諸問題について話し合い、それらについて決議するためです。ローマ帝国全域のすべての主教が招待されました。参加者は約300人といわれます。参加者数に関しては諸説ありますが、一般的に引用される数字は320名です。ローマ帝国の各地域から少なくとも一名代表者が参加し、英国からも参加者があったと言われます。また、ペルシャやグルジアといったローマ帝国以外の場所からも若干名の主教が参加したようです。

ニカイア公会議で取り扱うことが急務とされていた議論は、アリウスと名乗る司祭にかかわる問題です。アリウスは北アフリカ出身で、エジプトで司祭となり、当時のクリスチャン世界における最重要都市のひとつアレクサンドリアで働いていました。アリウスは、神の御子が永遠のお方ではあるが、始まりはあったと信じていました。つまり、御子の存在はいつかの時点から始まったという考えです。彼のもっとも有名な発言は、「御子のいなかった時代があった」というものです。神の御子が存在しなかった時代があったという主張です。アリウスは、御子が被造物で、父とは別個であり、父に従属するものであると教えました。アリウスは、父なる神だけがすべてにまさるお方だと考えました。そして根拠として、「御子は、…造られたすべてのものより先に生まれた方です。」というコロサイ1：15や、「父はわたしよりも偉大な方だからです。」というヨハネ14：28など、聖書箇所をいくつか引用しました。御子は神が最初に造られた被造物で、その後、御子がその他のすべてのものを造ったというのが、アリウスの考えでした。この教えは、アリウスが考え出したものではありませんが、彼がそれを公言した第一人者であることから、この神学的立場は「アリウス主義」と呼ばれます。ところで、コロサイ1：15やヨハネ14：28にはより適切な解釈の仕方があります。後ほど、これらの箇所についてお話します。

神の御子がいつかの時点で始まったかどうかという問題には、ある神学的疑問が隠されています。それは、神の御子イエス・キリストの本質（その存在や実体）をどう説明するべきかということです。御子は父なる神とまったく同じ本質、実体をお持ちなのでしょうか。それとも、似てはいるけれど、まったく同じではないのでしょうか。それとも実体はまったく別物なのでしょうか。4世紀初頭、これらの考えが教会を駆けめぐりました。新約聖書のある箇所はひとつのことを語り、他の箇所はまた別のことを語っているように見えました。しかし実際には、聖書全体をもってこの問題に当たらなければなりません。この疑問にかかわるすべての箇所を調べ、神の御子イエス・キリストの神としてのご性質を描写する最適な方法を見出さなければなりません。これが、ニカイア公会議に課された務めでした。

ニカイア公会議が招集された際、ローマ帝国全域の主教が招かれました。各主教は、助手として司祭2名および執事3名の5名まで同行させることを許されました。アレクサンドリアの町からは、キリスト教界の総主教であるアレクサンダー主教が出席しました。その同行者のひとりがアタナシオスという聡明な青年でした。この名前を覚えておいてください。ニカイア公会議でキリストの神性を支持する主張の中でもっとも説得力があったのはアタナシオスでした。キリストが父なる神と完全に同等で、父とともに永遠の存在であり、父とまったく同じ実体であると主張しました。アレクサンダー主教とアタナシオスは、「ことば」と呼ばれる神の御子イエス・キリストが父によって「永遠に生み出された」と教えました。父なる神はとこしえから父であられました。ということは、そこに子がとこしえからいたはずですが、繰り返します。父なる神はとこしえから父であられました。ということは、そこに子がとこしえからいたはずですが、父と子とともに永遠のお方なのです。そして、父と子は同じ実体です。これを神学用語で「ホモウシオス」と言います。英語では、「cosubstantial」（コサブスタンシャル）と言います。

ヨハネ10：30

10:30 わたしと父とは一つです。

ヨハネ1：1-2

1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。 1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

ヨハネ1：14

1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

ヨハネ14：28には、「父はわたしよりも偉大な方だからです。」とありますが、これはどうでしょう。それは、父なる神が御子よりも偉大な権威者であるということです。父なる神は父なので、すから。しかし、それは神としての本質において御子が劣っているという意味ではありません。

では、ニカイア信条に話を戻しましょう。ニカイアに集まった主教たちがイエス・キリストの神性に関する声明をどのようにまとめたか見ていきましょう。まず、使徒信条をふりかえりましょう。「わたしは、そのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、処女（おとめ）マリアから生まれ、…」では、ニカイア信条はどうでしょう。ここには、イエスが聖霊によってやどり、処女マリアから生まれたという一節の前に、非常に重要な一節が追加されています。

「われらは信ず。唯一の主イエス・キリストを。主は神の御独り(おんひとり)子、よろず世に先立って、父より生まれ、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずして生まれ、父と同質にして、万物は主によりて成れり。…」

ヨハネ3：16

3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

ヨハネ1：2

1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

ヨハネ1：3

1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

「すべてのもの」は、御子なる神によって造られました。このお方は、創造のときに造られた「すべてのもの」のひとつではありません。とこしえからそこにおられました。そして、このお方をおして、すべてのものは造られたのです。

ヘブル1：1-3a

1:1 神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、 1:2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を

万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。…

もう一度読みましょう。「1:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、」ニカイア信条には、「父と同質にして、」とありました。つまり、御子は父とひとつの本質、ひとつの実体であるということです。

では、非常に重要なみことばをここで読みましょう。

コロサイ1：15-19

1:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。1:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。1:17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。1:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。1:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、

御子は父とともに永遠の存在です。父と子とともにひとつの実体です。19節は、「神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ」と語り、15節は、「御子は、見えない神のかたちであり」と語ります。父と御子はひとつの実体なのです。

では、「造られたすべてのものより先に生まれた方」という個所はどうでしょう。アリウスは、御子が父の最初の被造物であるという自らの主張の根拠としてこの個所を用いました。けれども、この個所はそう言っているのでしょうか。そうではありません。この個所に関するアリウスの解釈は間違っていると言えます。18節を読むと、「死者の中から最初に生まれた方」と記されています。イエスは、死者の中からよみがえった最初の人だったのでしょうか。違います。「先に生まれた」とか「最初に生まれた」というのは常に時系列を指しているのでしょうか。明らかにそうではありません。イエスは、時系列順で言えば、死からよみがえった最初の人ではありません。同じく、15節の「造られたすべてのものより先に生まれた方」という部分も、御子が最初に造られた被造物という時系列を示す文と解釈すべきではありません。

「先に生まれた」とか「最初に生まれた」というのは、立場をあらわす表現で、君主の王座を受け継ぐ権利を持つ人物を指して用いられました。詩篇 89：27をご覧ください。ここで、神はダビデ王について語っておられます。「89:27 わたしもまた、彼をわたしの長子とし、地の王たちのうちの最も高い者としよう。」ダビデは長男ではありませんでしたが、神が彼を後継者となる長男の立場に置かれました。こうしてダビデは王として納める権利を持つ者となりました。御子なる神は、はじめから子の立場であり、造られたものではなく、父なる神と交わりを持っておられました。16節には、「万物は御子にあって造られた」とあります。そして17節は、「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っている」と語ります。これが、「造られたすべてのものより先に生まれた方」という意味です。

では、ニカイア信条に戻りましょう。キリストに関する部分の前半は終わりました。ニカイア信条は次のようにつづきます。

主はわれら人間のため、  
またわれらの救いのために  
天より下り、聖霊により、  
おとめマリアより肉体をとり、  
人となり、われらのため  
ポンテオ・ピラトの下に、  
十字架につけられ、  
苦しみを受け、葬られ、

聖書に従って三日目によみがえり、天に上り、  
父の右に座したまえり。  
主は栄光のうちに再び来り、  
生ける者と死ねる者とを  
審(さば)き給(たま)う。  
その御国(みくに)は終わることがない。

4月に私のメッセージを聞いた人は、使徒信条にも似た表現があったことに気づかれるでしょう。けれども、使徒信条にはなかったものもあります。画面をご覧くださいと、使徒信条になかった部分を太字と下線で示しています。「聖書に従って」という部分は、使徒パウロがコリント第一15:3-4で「聖書の示すとおり」と繰り返した個所に似ています。

この約10分ほど、ニカイア信条における神の御子の神性に関する基本声明について語ってきました。ここからは、主が地上に来られた目的についてお話します。その目的とは、「主はわれら人間のため、またわれらの救いのために天より下り」です。

ヨハネ3:16a

3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。

ニカイア信条は次のようにつづきます。「おとめマリアより肉体をとり、…」イエスは人間として生まれることで、人間の肉体をとられました。これは奇跡です。けれども、実在の女性を介した奇跡でした。

「われらのため…十字架につけられ、」これは、ユダヤの総督がポンテオ・ピラトの時代に起こった出来事です。

なぜ神は、私たちが救うために肉体をとらなければならなかったのでしょうか。他に私たちが救う方法はなかったのでしょうか。先ほど、ニカイア公会議の重要人物であるアタナシオスの名を覚えておいてくださいと言いました。彼には語るべきことがたくさんありました。彼は、ニカイア公会議の開かれる6-7年前に、「神のこぼの受肉」という本を書きました。これは、古典キリスト教書籍のひとつです。なぜ神が肉体を取る必要があったのでしょうか。アタナシオスは語ります。

「姿や性質を帯びていないものは、贖われていない。」

御子なる神が肉体を取られたのは、人間の肉体を贖うためでした。初めに、神は人を神との交わりのために造られました。けれども、神と人との交わりは、アダムとエバが罪を犯したことで壊されてしまいました。人間の墮落とともに、死と腐敗がこの世に入りました。

ニカイア信条には、「主はわれら人間のため、またわれらの救いのために天より下り」とあります。神は、人間の肉体をとられました。アタナシオスは、これが唯一の方法だったと言います。人間の体を贖うためには、神が人間の肉体をとらなければならなかったのです。

そして、主は私たちのために死なれました。

その後、よみがえられました。死に勝利し、最終的に体の完全な贖いを成し遂げるためです。

ローマ5:12

5:12 そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。

ローマ5:17

5:17 もしひとりの違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりのイエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです。

コリント第一15:20-21

15:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。 15:21 というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。

ある説教者は次のように言いました。「私たち保守福音派のクリスチャンは、キリストの神性を強調するあまり、キリストが人間であられたことが私たちを救うのだという事実を忘れがちです。イエスが正真正銘の人間になってくださったからこそ、私たちのために、私たちの罪のために、苦しんで死ぬことがおできになったのです。ですから、イエスの人間性は、私たちの救いにとって不可欠です。」（マーク・ストラウス博士）

そして終わりの時には、イエスは戻ってこられます。「主は**栄光のうちに**再び来り、生ける者と死ねる者とを審(さば)き給(たま)う。その御国(みくに)は終わることがない。」

これは、福音のメッセージです。神はすべてをお造りになりました。御子なる神は父と同等の神ですが、私たち人間の体を贖い、私たちを救うために、肉体をとられました。このお方を受け入れた人は、ローマ5:17にあるとおり、永遠のいのちを得ます。「その御国(みくに)は終わることがない。」

紀元325年、ニカイアに集まった主教らは、イエス・キリストとその働きについてこう表現することで同意しました。これは、簡単に導き出された結論ではありません。多くの議論が交わされました。違った視点を持った人々が真剣に問題に向き合えば、必ずそうなります。（使徒の働きでも、パウロがクリスチャンの間で律法主義に偏った人々と激しく論じ合った場面があります。）実際、ニカイア公会議の出席者の中で、アリウスに同情し、擁護した者もいました。けれども、公会議で彼の書物が読まれると、その内容に問題があることを理解しました。

最終的に、参加した主教たちの総意は、聖書全体の教えを考慮すると、キリストの完全な神性という観点に則しているというものでした。こうしてニカイア信条が作成され、出席した320人中318人が署名しました。アリウスの出身地である北アフリカから来たふたりの主教は、署名を拒否しました。けれども、出席した主教ほぼ全員が署名しました。

紀元325年に作成されたニカイア信条は、最後に聖霊に関する一文で締めくくられ、そのあとにアリウス派の教えを非難する段落がありました。

「われらは信ず。聖霊を。」  
これだけでした。

その呪いの部分はここで読みませんが、前の画面をご覧ください。

「御子が存在しなかったときがあったとか、御子は生まれる前には存在しなかったとか、存在しないものから造られたとか、他の実体または本質から造られたものであるとか、もしくは造られた者であるとか、神の御子は変化し異質になりうる者であると主張するものを、公同かつ使徒的な教会は呪うものである。」

これはずいぶん厳しい文章です。けれども、ガラテヤ人への手紙を読むと、パウロも偽教師を同じように非難しています。

ガラテヤ1:9 私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣傳伝えているなら、その者はのろわれるべきです。

さて、ニカイア信条の話はこれで終わりではありません。約55年後の紀元380年に、皇帝テオドシウスがローマ教区とアレクサンドリア教区の宗教をローマ帝国の国教にすると宣言しました。この時、キリスト教が帝国全体の国教となりました。ローマとアレクサンドリアの主教らは、神の子イエス・キリストが完全に神であるというニカイア信条の観点の支持者でした。

翌年の紀元381年には、皇帝テオドシウスは改めて主教たちの全キリスト教会議を招集します。こ



これは、会議が開催された場所にちなんでコンスタンティノポリス公会議と呼ばれます。そこでは、教会について議論すべき問題がたくさんありました。そのひとつは、聖霊をどうとらえるかという問題です。ニカイア信条は、聖霊についての声明を含んだかたちへと拡張されました。その声明は、聖霊が父や御子と同じくご人格をお持ちのお方であると断言します。その最後の部分は次のとおりです。

「われらは信ず。主なる聖霊、いのちの与え主を。聖霊は父から出て、父と子とともに礼拝せられ、あがめられ、預言者を通して語りたまえり。

われらは信ず。唯一の、聖なる、公同の**使徒的教会**を。われらは認める。**罪の赦しのための唯一の洗礼**を。われらは待ち望む。死人のよみがえりと来るべき世の生命(いのち)とを。」

「父と子とともに礼拝せられ、あがめられ、」聖霊は父と子と等しく礼拝されるべきお方です。また、父と子と同じく人格をお持ちです。ニカイアのキリスト教は、3つの位格をお持ちのひとつの神がおられると主張します。これは一般的に三位一体と呼ばれる教えです。

「聖霊は父から出て」ここで、ひとつ単語が抜けていると気づいた方もおられるでしょう。私たちの知るニカイア信条には、聖霊が「父と子から出て」と記されています。けれども、もともとは「父から出て」としか記されていませんでした。「子」に関する言及は、6世紀にスペインで開かれた会議で追加され、これが後に西洋の教会で一般的となりました。

ではここで、いくつか聖書箇所を読みましょう。

ヨハネ 14：16は語ります。

「14:16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」

26節にはこうあります。

「14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてください。」

使徒 1：8は、イエスが天に昇られる直前、弟子たちに語られた言葉です。

「1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

ニカイア信条の最後には、教会が公同（全世界に広がるもの）、かつ使徒的（使徒たちの教えを土台としている）という声明があります。

そして、「われらは認める。罪の赦しのための唯一の洗礼を。」とあります。これは、人類に対する福音のメッセージの核心です。ペテロは五旬節に偉大な説教を語りました。そして、私たちはどうすべきですかと尋ねる人々に、次のように答えました。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」（使徒 2：38）

ニカイア信条は、私たちが復活と後の世における永遠のいのちを待ち望んでいると締めくくります。

この箇所についてもっとお話できたらと思いますが、時間がありませんのでここで終わります。

今日のメッセージの中心聖句として、私はコロサイ 1：15-20を選びました。その箇所の大半はすでに読みましたが、ここで、18節の冒頭部分に注目しましょう。「また、御子はそのからだである教会のかしらです。…」この箇所から、私の好きな賛美歌が思い浮かびます。メッセージの後でその賛美歌を賛美するように賛美チームにリクエストしました。

キリストイエスを基として  
打ち立てられし御教会は  
君が血をもて  
買い給いし  
花嫁たちの集まりなり

使徒信条	ニカイア信条 (ニカイア・コンスタンティノポリス信条)
<p>わたしは、天地の造り主（つくりぬし）、全能の父なる神を信じます。</p> <p>わたしは、そのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、処女（おとめ）マリアから生まれ、ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府（よみ）にくんだり、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父なる神の右に座しておられます。そこから来て、生きている者と死んでいる者とを審（さば）かれます。</p> <p>わたしは、聖霊を信じます。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだの復活、永遠（えいえん）のいのちを信じます。 アーメン</p> <p>- 日本聖公会「祈禱書」より</p>	<p>我は唯一の神・全能の父・天地とすべて見ゆる物と見えざる物の造り主を信ず</p> <p>我は唯一の主イエス＝キリストを信ず。主はよろず世の先に、父より生まれたるひとりの御子、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずして生まれ、父と一体なり。よろずのもの主によりて造られたり。主はわれら人類のため、また我らを救わんがために、天よりくだり、聖霊によりておとめマリヤより肉体を受け、人性をとり、我らのためにポンテオ＝ピラトのとき、十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にかないて三日目によみがえり、天に昇り、父の右に座したまえり。また栄光をもって再びきたり、生ける人と死ぬる人をさばきたまわん。その国は終わることなし</p> <p>我は聖霊を信ず。聖霊は命を与うる主、父と子よりいで、父と子とともに拝みあがめられ、預言者によりて語りたまひし主なり。我は使徒たちよりの唯一の聖公会を信ず。罪の赦しをうる唯一の洗礼を信認す。死にし人のよみがえりと来世の命をのぞむ アーメン</p> <p>- 『日本聖公会祈禱書(1959年版)』より</p>